



# 第 7 号

発行所

鎌倉市材木座 6-17-19  
光明寺中神奈川教務所内  
浄土宗神奈川教区青年会

発行人

清水光致

編集者

浄青神奈川編集委員

## 善導大師千三百年奉修 神浄青音楽法要を顧みて

会長 清水 光致

善導大師千三百年遠忌にあたり私達青年僧侶が、浄土宗として五十年に一度の法要を営む時に出席していただいたこの良縁、喜びに堪えない。人間性の破壊されたこの世の中に生まれ念仏信仰に目覚め正しい信仰と明るい実践生活の道を教えて下さるお念仏のありがたさを身をもって感じさせられた次第である。この良き年に神浄青が本山光明寺善導忌法要の一座を音楽法要で勤めさせていただき二重の喜びに感謝する次第である。

音楽法要を修するにあたり約一年前からいろいろ計画準備し五月十五日の当日は青年会の総力を結集出来たと、これひとえに会員一人一人の精進のためのものである。

この現代社会にマッチした音楽法要を会員に奮いたたせ、気概を持たせたらには計画準備を全面的に担当してくれた港南浄青の力、結末の集約に尽きると言える。

当日光明寺本堂を参拝者で埋め尽した中で、



黒衣、如法衣の青年僧侶の張りある声量で、善導大師の「往生礼讃」を勤めさせていただいたあの感激、目頭の熱くなる思いであった。  
今までは、何も気にせず唱えてきたあの往生礼讃、生きているのではない、生かされている喜びを味い教え、これからそ



錯覚をしたほどである。これほどまでの感激を浅学非才な凡夫に教えてくれたのも音楽法要のすばらしさ、又、五言七言の韻を踏み、分りやすい現代かなづかいで和訳したことによるものでもあろうか。法要は担当港南浄青里見会長の司会により、献花と献灯を座間幼稚園の園児、献香は大正幼稚園の六名の可愛らしい園児によって、献花偈、献灯偈、献香偈を大正幼稚園琴奏女性合唱団、増田晃久歌劇研究所合唱団、総勢三十名のコーラスの中で蓮華のごとく、輝ける妙なる香を大師前に供養し、増田先生指揮のもと四十八楽団の演奏のさなか厳肅なる黒衣、如法衣の青年僧侶二十名が入堂し、奉請「法事讃」日中礼讃「往生礼讃偈」日中無常偈「往生礼讃

して現在の自分に一生懸命に努力精進する気構えをあのやさしい目で見守り教えてくださっているような一瞬。善導大師が現存のこの世におられるのではないかと

偈「誦経「無量寿経・念仏往生願」御回顧、撰益文「観無量寿経」念仏一会、四弘誓願「往生要集」をお唱えし退堂と四十分の音楽法要を厳修勤めた次第である。この音楽法要を通して一人でも多くの方々に仏のみ教えを理解していただきたい次第である。なをこの音楽法要の為に御尽力いただきました関係各位の諸師に深甚なる敬意謝意を表したい。

善導大師大遠忌をおくり吾々浄土宗徒は他力本願の救いに力強く生きる喜びをかみしめたものです。この時に当り、唯御遠忌謝徳を回顧するだけで終わりとするのは形式的な法要のみとなり、明日は又忘れてしまう結果になる。これでよいのかということですが、これを期に反省というか覚悟というか、しっかりと先方を見つめる姿を整え若い人々が氣を揃えて邁進する姿を求めるものです。そして自己の使命と観じ浄土宗徒の本然の姿を来る日に向けて發揮する氣構えを固めることではないでしょうか。今後の浄土宗を發展させるのは今の浄青の人々です。吾々老人はこれからの人々に期

### 善導忌をおわって

宗議会議員 野中純道  
良心寺住職

待し望みを托し、やがて消えていく身です。頑張つて戴きたいものです。今の世の中をよくよく見つめて下さい。日本の国をみて下さい。自由と文化は最高です。世界中にこんなよい国よい社会はないのかということですが、

又とないでしょう。ここで考えて下さい。こうなつたら今後はどうなるでしょう。今迄は追いつけ、追い越せといった国が、さて最高になつたら今後は下る外はないでしょう。ですからこれから三十年、五十年、

### 善導忌法要に

#### 参加して思うこと

副会長 塚田 勝晃

昨年福岡での大本山善導寺のお迎え法要を皮切に、善導大師一千三百年遠忌が、各地に於いて盛大に奉修され、又中国、玄中寺、香積寺に於いても日中合同法要が奉修され、今生かされている私達僧侶にとつては、一生に一度の勝縁でした。内外共に困難な時代に、無事善導忌が終了した事は、非常に喜ばしいことでした。

しかし各地で、盛大に奉修された善導忌、はたして大師の行業通りに奉修されたであろうか。観経疏玄義分の「先観大衆発願帰三宝」道俗時衆等、言々、を私達が忘れて

百年後の日本はと思えば、……。このままではどこまでおちるのでしょうか。これを止めるのは皆さんです。大いに期待しています。化学、物質万能の社会に今大切な問題が叫ばれている所以です。この日本を支える為には吾々仏教徒が

又とないでしょう。ここで考えて下さい。こうなつたら今後はどうなるでしょう。今迄は追いつけ、追い越せといった国が、さて最高になつたら今後は下る外はないでしょう。ですからこれから三十年、五十年、

宗議会議員 野中純道  
良心寺住職

又とないでしょう。ここで考えて下さい。こうなつたら今後はどうなるでしょう。今迄は追いつけ、追い越せといった国が、さて最高になつたら今後は下る外はないでしょう。ですからこれから三十年、五十年、

れていたのではないつたか。善導忌の為に長い準備期間をかけた割には、あの長安の都光明寺で「大衆と共に」大師が唱えられた念仏や礼讃の音が、参拝の人々の中からほとんど聞えなかつたのが残念でした。(この点念仏については私達が大きい反省することではなからうか)

又団参にしても一部の寺院のみで、法要に随喜された寺院の方々が、檀信徒の方々と共に参拝されていたら、もつと大師の教えが理解され流布されたのではなからうか。中国に於いて奉修された合同法要にしても諸々の事情があつたと思いますが、僧侶だけでなく檀信徒の方々と同行で行つておれば、もつと有意義な法要が営まれたのではと思ひます。

宗祖に還り、高祖を偲び、いつまでもこの原点に立つて民衆、大衆の為の仏教徒、浄土宗徒でありたいと思ふものです。

宗祖に還り、高祖を偲び、いつまでもこの原点に立つて民衆、大衆の為の仏教徒、浄土宗徒でありたいと思ふものです。

宗祖に還り、高祖を偲び、いつまでもこの原点に立つて民衆、大衆の為の仏教徒、浄土宗徒でありたいと思ふものです。

教区訪中に於いて数名の檀信徒の方が同行され、玄中寺、香積寺等の法要に参加され感激されていたのが強く印象に残りました。

善導忌は本年度で終りましたが、唯終つたと言うのでなく五十年先の善導忌に向つて、宗祖法然上人が偏依善導と尊崇された意義を深くかみしめ、我々青年僧が諸大徳と共に、大師の御徳と教と、我々に示された行業を深く体し、現代社会に生かされている衆徒として、「今」「共」「願」を檀信徒と共に、広く一般の人々に流布していただきたいと思ひます。

### 往生礼讃偈(神浄青和訳)

#### 日中礼讃

真心(まごころ)をこめて  
弥陀にすがります  
弥陀の姿は輝きそびえ  
そのみ光はすべてを照らす  
真心をこめて念仏称えれば  
そのみ光に救われる  
いざ信じよう  
弥陀の誓(ちかい)はすべてにまさる  
真心をこめて念仏称えれば  
もれなく浄土に往くという  
すべへの仏、それはまことと、  
ときあかす  
弥陀の浄土に生れれば  
花の台(うてな)で  
み教(おしえ)を聞き  
さとりへ至る

#### 日中無常偈

一度しかない人生を  
励まなければその人は  
根のないことと同じこと  
咲いてる花をつみとれば  
いつまで保つそのかおり  
人の命も同じこと  
無常の風は足早(あしはや)に  
ひとたび吹けばことごとく  
生あるものを奪いさる  
すべての友よ怠らず精進をして  
今共(いまとも)に  
弥陀の浄土に生き往こう



今年で三回を数える教区浄青花まつり愛のプレゼント活動は、先の四月十二日(土)、強風で雲ひとつない青空のもと「金沢母子寮」で行なわれた。

寮への長い階段を、会員諸兄からの沢山の真心を持って一段一段登ると、待ちかねたかのように、子供達の可愛い顔が、ひとつまたひとつのぞき、笑顔で私達を迎えてくれた。

今回が初めての参加であった私同様、子供達も始めのうちは緊張した様子でセレモニーに加わっているようだった。合唱する仏讃歌なども、どことなく恥ずかしそうに、もうひとつ元気がないように感じられた。それでも私が皆の前に立ち、紙芝居を始めると、子供達が真剣に耳を傾け、食い入るように私を見つめてくれているのが、手に取るように伝わってきた。そして、おなじみになった森泰彦師による、ゲームやお話が始まる頃には、本当に楽しそうな、明るい子供達の素顔がそこにあつた。

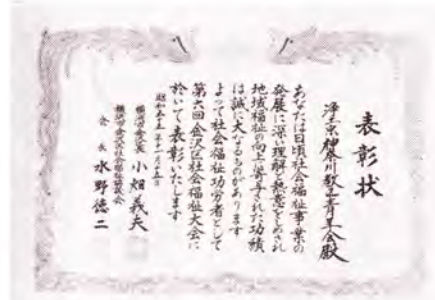
この子供達の毎日が、明るく、楽しいものであって欲しいという願いは、お母さん

～ 第 3 回 ～

花まつり愛のプレゼント活動

—金沢区より表彰される—

や先生方だけでなく、私達浄青の願いでもあります。子供達の「さよなら」をした後、あの寂しげな顔が今も思い浮びます。私達は本当に微力ながらも、こうした活動を長く長く続けたいものであります。



当会が金沢区より社会福祉功労者として表彰されました。ささやかな活動が認められたことは会員の協力の賜。今後の活動への責任を強く感じる。末長く続けるとともに、各地域に拡げて行くことにしたい。

戸松 秀明記

全浄青十周年結集

§ 他宗見学記 §

四月二十六、七日にかけて長野県善光寺大本願において全浄青十周年記念大会が開催され、清水会長以下七名が参加した。今回は十周年を記念して、本誓殿での尼公上人御親修による開白法要、大本山知恩寺法主林靈法台下の記念講演、長野国際会館での祝賀会などが行なわれ、今までになく盛会なものであった。記念結集閉会後、川中島を中心に市内観光をし、長野の春を満喫し



た。翌二十八日は他宗見学にあて、北軽井沢日月庵を訪ずれ、臨濟宗妙心寺派龍源寺住職松原泰道師の御指導のもとに坐禪を組み、引き続き講話を頂戴し、「禪とはなにか」ということを解り易くお話し戴いた。その後参加者一同師を囲んで雑談をまじえながら昼食をとり、師のあたたかい心に接しながらとても有意義なひとときを過ごすことができた。師に見送られ庵を後にし、軽井沢、鬼押出などを散策した後、一路帰途にいたが、この研修が今後の浄青活動に活かされるよう努力したいと思う次第である。

今井 正紀記

神奈川教区主催の夏期僧堂が今年も七月二十九日から三日間、大本山光明寺を会場として開催されました。浄青会員がお手伝いをするようになって三年目、我々が指導員として自覚してきたのか、僧堂生に対する熱意が非常に強く感じられた。開講式では、毎年毎年この行事を楽しみにして参加した子供、初めて参加した子供、それぞれに大きな期待と不安が入りまじり、緊張した様子が感じられた。また、この二泊三日の夏期僧堂から楽しい思い出を持ち帰ってほしいと願うものである。

夏期僧堂ルポ

吉水

智栄記

ともかくにも、年令をこえた縦の関係という集団生活にふれることは、学校生活では学べない貴重なものである。このような経験をした神奈川浄青予備軍を非常にたのしい後輩に見えた。

も楽しい時間それは、水泳の時間である。ところが今年のは冷夏という異常気象の為か、水温も気温も例年通り上がらず、早めに取りあげたり、砂浜で遊んだり、僧堂生にとっては、心残りの水泳時間だったのではないかと思つた。しかし、その分、夜の方にもあました体力を監視役の指導員と枕投げをする僧堂生達とのいたちごっこが夜遅くまで続くのである。

光明寺お十夜

念仏行進と伝導

今年で三回を数えるた天気も、汗ばむぐらしい晴天に恵まれた十四日朝、本山に集合し全員直ちに行脚姿となる。十時過ぎ本尊前にて結願後、宣伝カーを先頭に一路鎌倉駅に向い念仏行進をすめる。今回は特に募金などもせずに念仏行進を行ったが、中にはわざわざ追いかけてきて御喜捨下さる方や、合掌して見送る方もいて、有り難くまた身の引き締まる思いであった。



ふだん車で通り過ぎてしまう道も、こうしてなれないワラジで歩いてみると意外に疲れるもので、日頃の有り難さがしみじみ感じられたと同時に、なにげない小川の中に小魚の群れを発見したりで、また別の意味で意義のあった念仏行進であった。

駅前では例年の通り、車の上からの街頭伝導とパンフレット配布をする。パンフレット配布の後、再び念仏行進にて帰山し、一時より九品寺出発の唱導師のお練りに参加する。今年は多数の会員の参加者を得て、午後二時過ぎに活動を終了した。 森本 祐康記



昭和五十五年度

定例総会報告

四月五日大本山光明寺において、神浄青総会が行なわれ、前年度報告と本年度計画、予算も満場一致で承認され、新しいスタートをきった。記念講演として、布教・伝導に御活躍の如実苑で御承知の坂野泰巨師をお迎えし、理念と実躍をお聞きした。今後の浄青活動の道を提示下さったことは会員諸氏にとっても感銘を受けるとともに、意を新たにしてく内容で中身のある総会となった。

昭和五十五年度

事業報告

執行部動向

4 / 5	光 明 寺	五十四年度定期総会
4 / 12	金沢母子寮	愛の花祭りプレゼン
4 / 16	増上寺	善導忌 常念仏参加
4 / 19	光 明 寺	臨時理事会
4 / 26	長野善光寺	関プロ研修会、他宗見学
5 / 10	光 明 寺	清掃・音楽法要練習
5 / 13	光 明 寺	善導忌奉仕
5 / 14	光 明 寺	音楽法要
6 / 28	宇 都 宮	第八回関プロ研修会
7 / 25	光 明 寺	理事会
7 / 29	光 明 寺	夏期僧堂
8 / 24	静岡西林寺	静岡教区少女女講
8 / 26	静岡西林寺	習会参加
10 / 4	光 明 寺	理事会
10 / 11	光 明 寺	清掃奉仕
10 / 14	光 明 寺	念仏行進・街頭伝導
11 / 1	光 明 寺	理事会

一 教化ポスター第 3 号 発行 一

来春、教化ポスターの第三号を発行することになりました。生活の中の仏教をテーマに作成してきましたが、この度は、檀信徒教化の手段として利用いただけるように御説教とともにお渡し頂ければ幸いです。

(1)

共に生きる

国助善導会  
浄土宗神奈川教区青年会

(2)

和顔愛語

国助善導会  
浄土宗神奈川教区青年会

後 記

○善導忌で一年通してきたが、この一年だけになりはしないか。善導大師の教えは永遠。常に原点に立とう。  
○浄青活動も一つの山に向って登り始めた。新たな登りにさしかかりつつあると思う和合から自行へ、そして化他へと一歩ずつ登りつめよう。会員諸氏の健闘を祈る。毎度のことになった発刊の遅れをお詫び致します。さあ西年だノ、翔ねばならぬ。

編集子

